



TITLE:

<批評・紹介>植松正著「元代江南
政治社會史研究」

AUTHOR(S):

櫻井, 智美

CITATION:

櫻井, 智美. <批評・紹介>植松正著「元代江南政治社會史研究」. 東洋史
研究 1999, 57(4): 742-750

ISSUE DATE:

1999-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/155226>

RIGHT:

植松正著

元代江南政治社會史研究

櫻井智美

植松氏の数多い研究のうち、「江南」に関わるさまざまな問題を扱った論考が、著者の校訂を経て一冊の本にまとめられた。手に入りにくい雑誌に掲載された論考を含め、多くの読者が、著者の研究の軌跡を一息にたどれるようになったのは、非常に喜ばしいことである。著者は言うまでもなく、戦後、特に昭和四〇年代以降の日本における元代史研究をリードしてきた研究者の一人である。とりわけ、「江南」地域に関わる問題の具體的分析と元代法制史のまとめつつ研究は、他者の追隨を許さない。一貫した問題を對象に設定して研究を繼續している著者の根氣と努力が、本書にまとめられた成果の後ろに見え隠れしているようである。

本書に収録された論考は、一九六八年～一九九六年の三十年間にわたって發表されたものであり、全編とも、著者の關心を背景に、「江南」が政治的・社會的にどのような位置にあったかを追究する。序章で述べる如く、各章は「適宜に加筆、修正、削除を行」ないつも「おおむね原文の體裁を残している」(一五～一六頁)。つまり、昭和四、五〇年代の研究の成果もそのまま留められているため、我々は、本書によって著者の研究の数々を参照する便が得られるだけではなく、さらに、元代史研究というものが、ここ三十年間の日本において、どのような環境の中で、どのように進められてき

たのかについても、その一端を窺うことができるように思われる。本書の構成を示すと以下のようなものである。

序章

第一部 江南地域社會と經濟政策

第一章 元初江南における徵稅體制について

第二章 元代江南の戶口統計と徵稅請負制度

第三章 元代江南投下領の分賜について

第四章 元代江南投下考

—『元典章』文書にみる投下と有司の相克—

第五章 元代の賜田についての一考察

—その返還の動向を手がかりとして—

第二部 江南地域社會と在地官人

第一章 元代江南行省宰相考

第二章 元代江南の地方官任用について

第三章 阿里海牙一族と潭州

第四章 元代江南の豪族朱清・張瑄について

—その誅殺と財産官沒をめぐる—

第五章 元代江南の一高官の犯罪

第三部 江南地域社會と少數民族

第一章 元初の舍族の叛亂について

第二章 苗軍の軌跡

本書或いは本書に收められた各論考の内いくらかは、すでに書評が存在するため、^①それらもあわせて参照されたい。さて、まずは既

發表の書評との重複はなるべく避けつつ、本書の配列におおむね従いながら、評者なりに簡単に内容を紹介し、各論についての個別的な意見を述べていこうと思う。

第一部は、大きく分けて二つの問題が論じられている。第一・第二章では、徴税をめぐる問題が論じられ、第三章以下では、賜田と投下に関する問題が論じられる。第一章では、まず至元二〇年代を中心とした「理算」の経過が述べられる。サンガ執政前後に、厳しい未徴錢糧の取り立てが行われたことを、政治的側面・制度的側面から検討する。一方で、江南における元初の税收が南宋の公田の状況を繼承するものであることを、史料が豊富な松江と鎮江を例として證明する。宋代の公田が元初においても、そのまま徴税體制の制度的基礎となったとするのは、第二部以降で述べられる官制などにおける宋から元への人的踏襲状況に鑑みても、説得力のある結論である。前代や後代との関連に注意を拂い、それを初めて實證的に示した著者の成果は、今でも定説として受け入れられている。

第二章では、第一章でも多少ふれている（四〇頁等）租税の不足分の代納を核に、戸口統計の實際と、それを基礎とする徴税請負制度について詳細に論じる。まず、南宋末元初の戸口の推移について分析し、兩浙での戸口の伸びに注目する。それと同時に、括勘といわれる至元二〇年代の戸口調査のやり方を説明し、戸ごとに口數と事産を詳細に報告させた上で帳簿を作成するという、表面上は嚴格な調査がなされたとの史料が存在する一方で、調査が不十分な江西行省などでは、一戸〓五口となるような机上の計算が必要な帳簿ができあがるという、ある意味では現實に即した對應がなされたこと

が明らかにされる。もともと、つじつまあわせで作られた帳簿に従って行われる徴税は、請負責任の行政システム（九二頁）の中で、どの段階かで代納が行われたとする。

南宋末元初において、兩浙及び江東地方の戸口が他の地域と比較して著しく増加したことは、移民の動向を表すだけでなく、モンゴルによる江南接收状況を説明する際にも援用できる資料である。また、徴税請負制度という、いわば責任のなすりあい、元代ひいては中國近世以降において、極端な文書依存の構造の因となっていた、各級官吏の責任回避の指向との連関が想定されるだろう。

第三章以下で追究される問題は「投下」であり、その中でも著者は江南の投下について考證を進めるとする。投下とはいかなるものか、という根本的問題は、多くの研究者が取り組んできており、一見解決がついたかのようなようである。しかし、實のところ、著者が「現在のところ、その江南の投下領がどこに設置されていたかすら明確に整理したものがないようである」（九八頁）、「南中國獨自の問題として取り上げられたことはさほど多くない」（一二三頁）などと述べるように、特に江南におけるその實態は、踏み込んだ研究がなされていないといつてよい。第三章に示される著者の作業は、『元史』食貨志に見える「歲賜」の項目だけでなく、本紀に散見する賜田の記事とも結びつけて、初めて総合的に検討した點で、非常に有用かつ意義深いものである。さらに、宗室や功臣に對して分地を與える行為の最終目的が、江南においては、北方の投下を論じる際におきまりの「人戸」ではなく、「田」とその土地からあがる税收であったことを證明し、南北の違いの具體的な一側面を見事に浮かび上がらせている。

そして、第四章では「投下領の實態」(一二四頁)を追究するた
め、第一節では戸計長官司、第二節では財賦都總管府と財賦提舉
司、第三節では『元典章』卷九、吏部、投下の各條について、先行
研究があるものも含め、改めて順に分析される。これら各條から抽
出される事件は、どれも具體的かつ寫實的で、當時起こっていた紛
争の様子をよく説明しており、特に第一節の戸計長官司をめぐる問
題は、投下の實情の一端を表すものとしてとりわけ面白いテーマで
ある。ただ、本節で取り上げられた史料が語る事件の舞臺は、章題
とは違って、實は江南のものばかりではない。つまり、以後同じよ
うな事件が起きた場合に、その案件をいかに處理するべきかを示す
前例として、江南にも文書が送られただけで、華北で起きた事件を
發端とする條もかなりある。この點、本書の讀者は注意が必要であ
る。一方で、我々研究者の課題としては、「投下領の實態」と「江
南の投下領」を、さらに地域を限定するなどの方法を以て、分析的
に結びつけていくような地道な作業も、今後不可欠であろう。

第五章では、親族功臣などへの賜田の動向を歴史的にとらえよう
とする。その中で賜田と職田における問題の類似性を指摘する。さ
らに、本章は、中國において超時的普遍的な問題ともいふべき、土
地の兼併及び胥吏や富裕層の問題を明らかにすることで、第一部の
まとめともなっている。

第一部が主に經濟政策を軸としてまとめられているのに對し、第
二部は政治や制度について扱う。第一章では、「江浙行省・江西・
湖廣」など南中國の行省の宰相となった人物についてリストを作成
して分析を加え、第二章以降は、至元・大徳年間を中心にした官員

登用や地方官の動向を、様々な角度から具體的に探るものである。

まず、第一章で作成された一覽表は、今後の研究の進展に寄與す
る、たいへん貴重な成果である。これまで元代史研究者が行省の宰
相について調査する際には、『新元史』の不十分な「行省宰相年表」
などを檢索し、その後、その他の個別史料から逐一拾っていくしか
方法がなかった。それが「總數は五七四人」(一八八頁)というま
とまった形になり、一目で概要を見渡せるようになった利便性は計
り知れない。その上で、著者は、主に南人の仕官狀況に着目して三
時期に分割し、それぞれの時代背景を簡單に説明し、さらに、表の
分析から明らかになる問題を幾つか提起している。①北中國出身の
漢人の南中國での任官について。②タングートがモンゴル勢力の庇
護のもとに、どのように活動したのか。③世襲的傾向の詳細な分
析。④知識人出仕の經緯と科擧の再開。これらが、著者の提起する
主な問題であり、どの項目も江南研究にとって必ずや解決が必要な
ものばかりである。

これら以外にも評者なりに問題をつけ加えれば、①の結果は、南
中國出身者の、中書省及び陝西その他北方行省への出仕と比較する
必要がある。また、一般的に平章政事がトップである制度に照ら
すと、表中に丞相クラスがかなり現れることをどう解釋するのか、
實際の任期はどうかなど、表から浮かび上がる基本的かつ重要な問
題は数え切れないほどである。さらに、表の項目にない問題、例え
ば様々に異なる出仕経路、複雑な人の關係など、今後江南における
官吏の人的構造を追究する際にも、この表が利用できる。

本章で、一つだけ気になるのは、表分析の際に數量化の基準とな
っている「氏族・本貫」の項目における「南人」とは何か、という

定義についてである。著者は「南中國出身者（舊南宋領の地域の出身者、いわゆる南人）」という表現を採るが（一八九頁）、『元史』選舉志に記載されるように、南宋治下のすべての人々が必ずしも南人という譯ではない。制度的には「元の江浙・湖廣・江西三行省及び河南行省の江北・淮南諸路」の出身者という明確な地域範圍を持つ。つまり、四川出身者は南人ではないことを指摘しておきたい。

第一章での分析の基礎を作ったと思われるのが、第二章以下の研究である。第二章は、地方官任用の全體を概観しつつ、時期ごとの個別問題を掘り下げる、極めて實證的で價值のある堅實な成果である。江南地方でいう元初、つまり至元年間後半、人的にも制度的にも横滑りさせたかたちで、南宋時代の舊官員がそのまま地方官に任用されていたことを明らかにする。併せて、南宋末の進士登第者の動向も追っている。これは、「南人」がどの時期にも官界から締め出されていたとする、歴代割記などの一部の内容を覆す。その後、時期が下るにつれて冗官問題・豪民問題が発生し、政權に不都合な「南人」官吏が徐々に増えてきたため、その對應として官吏の任用・退任を制度化し、豪民の取りつぶしが強行されたことを指摘する。第三・五章は、第二章の第二・三節で挙げられた問題について、具體例を掘り下げて詳細にたどったものである。

第三章では、湖南地方における阿里海牙一族の動向が、その息子貫只哥のころの一事件を中心に分析される。『元典章』該條の絶妙な解釋により、事件の詳細が目の前に浮かぶかのようである。なお、阿里海牙の孫である小雲石海涯について、中國の教養を身につけていた彼が、その「あり餘る才能を發揮せなかつたのは、征服者としての自分の家の歴史についての自己撞着ではなかつただろう

か」とむすぶが（二八九頁）、彼については最近別の角度から詳細な考察がなされており⁽³⁾、あわせて参照すべきだろう。

第五章では、江西地方の代表人物胡頤孫の事件を、やはり大徳年間の大事件として取り上げる。そして事件の経過だけではなく、江西における貿易や裁判など、實際の政治經營の側面を詳細に追究し、特に奉使宣撫の重要性を指摘する。さらに、明清時代の本籍回避制度の原因が元代の社會状況にあったのではないかと問題提起する。著者が第二章などで挙げる程鉅夫『雪樓集』卷一〇「吏治五事」（二三〇頁）の中には、南北の地方官を相互に遷轉させることを請うたものがある。また、實際に鎮江路において、正官だけでなく首領官までもが、多くは華北の出身者であったことがわかつている⁽⁴⁾。そこから、本籍回避制度の淵源もまた元代にあった可能性までも指摘できるだろう。ちなみに、本章での對象地域が江西地方であり、次に見る第四章が江淮・江浙行省におけることであるため、江南の三行省から一つずつ例が挙げられ、それぞれの地域の政治・經濟狀況が少しづつ言及されていることになり、これは著者の配慮に違いない。

その第四章では、やはり同じ大徳末に誅殺籍沒された朱清と張瑄について、こちらは中央政界の状況と絡めて考察を進めている。朱清・張瑄の誅殺は、單なる經濟的な問題に止まらず、皇后の權力と絡んだ政治色の濃い事件であったという捉え方は、論考發表當時（一九六八年）にあつては、全く斬新な見方であつた。それまでの長い間、仁宗延祐年間こそが、中國方面における制度面の整備や中華文化の吸収が、世祖至元年間について積極的に行われた時期であつたと、漠然と論じられてきた。著者は、ごく初期のこの論考中

で、既に當時の學界の定説に疑問を呈し、大徳年間を主要な研究對象としたのである。江南地方での政策と、これら三事件の分析からは、大徳年間のそれも中期には、すでに江南地方に對する明らかな政治的方向轉換があったことが讀み取れる。それが、はっきりとしたかたちで、官吏任用に反映されるのが武宗以後であり、第一章における第一・二期の区分は、事實上この變化をひとつの根據としていることにもなるのである。

この第一期と第二期の交代期に關しては今後さらに追究が必要な時期だと思われる。というのも、政治的にも制度的にも、この時期に大きな變化が見られ、解明すべき問題が多く残っていると思われるからである。例えば、著者が指摘する、科學の再開をめぐる問題やその位置づけもそのひとつである。著者は科學の再開を、從來定説の如く言われていた角度とは別の視點から、「江南土著の官吏を大量に罷免した」(二五五頁)後で、「地方官として有能かつ良質の人材を得る」(二五六頁)という目的があったことを指摘した。良質の官僚が不足していたという當時の状況を直接的な原因として科學が開始された、とする結論それ自體は、無批判に踏襲されていた定説への挑戦として意味があるだろう。しかしながら、人材不足という判斷の傍證の一つとなっている、『元史』武宗本紀の記事(二五五頁)は、實際には武宗個人の先走った行動を諫めた意味合いが強く、武宗が必要に迫られて官を大量に登用したことを指すのではないだろう。そもそも、官吏の肅清という側面は大徳末に始まったことではないし、また、至大年間に官員を減らす命令が出されていた状況に照らしても、官界全體として人材不足がどの程度深刻であったのかは、正直なところわからないのである。そうすると、著者

が提唱した人材不足説も、有力な「物的證據」を得て初めて斷言できる結論となるのではないだろうか。

さて、第三部はわずかに二篇を収めるのみだが、畚族の叛亂と苗軍の動向という二つの課題を研究對象とするのは容易なことではない。民族史・言語學としてもちろん歴史學などを總合して初めて對象とすることのできる分野だからである。第二章において、民族叛亂を茶賊・鹽賊などの實態と結びつけて述べたり、彼らの活動が『至元新格』に反映されていることを指摘したりできるのは、著者の視野の廣さが土臺となっているようである。

以上述べてきたように、本書が對象とする問題は、政治・經濟・制度・社會とあらゆる面に及び、一見まとまりがないようでありながら、すべては、「元代」という時代・「江南」という場所の二つの軸の接點で結びつく。そして、どの論題も、當時の状況の解明にとつて土臺となるような、基本的かつ、だからこそ困難な問題ばかりである。著者がこのような研究課題を選択してきたことに、改めて敬意を表したい。ただ、本書を一つの完成した研究作品として見直してみた時、全體に關わる問題として氣になる點も無しとしない。以下、評者の視點に偏るが、若干述べてみたいと思う。

まずは、史料の解釋の問題である。二九頁で理算における追徴の對象は「中統元年(一二六〇)以來」の未徴分とされる。しかし、『元典章』新集の該條において、とりしまりの對象とされるのは、現在までの未徴分すべてではなく、あくまでも現在以降の錢物のみではないだろうか。理算は著者も述べる如く、本来「きちんと計算

する」という意味を持つ。そこから推して、理算を「強制的な錢糧徵收」と読み換えることには、確かに異論はない。ただ、このような、理算の時期にかかる史料がすべて、ストレートに未徴分の清算(三三頁)を指すかどうかは、詳細な検討が必要であろう。

また、やはり『元典章』の「大小勾當體例」(二四三—二四四頁)について、著者は、「使臣の忽里罕は安西王の令旨によって、軍勢力を背景に吉州路で物資の徵收を行おうとした」と理解する。しかし、該條の「軍の氣力ちからは用いる」の部分は「軍の氣力ちからに用いる」と読むべきであって、徵收する物資、つまり「水弓・皮袋・段足・沙羅并びに利錢の鈔錠等の物」の使いみちを指しているのではないのだろうか。さらに、續く「使臣合喫肉食」の條において、この一條のみからでは、羊肉の供出を要求したのが諸王位下の使臣であると特定することは不可能である。「投下の擅行」(九八頁)・「投下の恣意的行爲をできるかぎり抑制しようとする一般行政官たちの姿」(一四六頁)という結論が、先にあるかのように思ってしまうのは、評者の勘ぐりすぎだろうか。

次に、地域設定の問題である。第一部第四章において、史料が語る事件の舞臺が江南のものばかりではないこと、及び、第二部第一章における「南人」の出身地域の定義については、すでに指摘したとおりである。ここで取り上げるべきは、江南を論じる際の對象地域として、淮南に關する情報が大きな根據となっていることである。特に第一部で社會狀況・經濟狀況を検討する際に、江南と淮南の史料が同じレベルで語られるのは看過できない。著者は「江淮行省の名のもとに、兩淮地方は兩浙や江東地方とともに一體的に運営されていたので、政策史的考察のために淮南地方に對する施策をも

考慮にいれておきたい」とする(三四頁)。しかし、兩淮地方と江東・浙江地域の經てきた歴史が全く異なっている以上、兩地への政策の方向も一樣ではなかったはずである。兩淮地方はそれまでの約一五〇年に及ぶ南北對立の結果、最前線として、人のあまり住まない、まさに荒土となっていた。そのような地域をもう一度耕作できる土地とする、いわば入植のような措置が採られた。それに對して、江南地方はモンゴルの進攻のもとで建築物や土地が荒廢したとする記録もある一方で、南宋以來の人口流入や都市の發展の中で、戸口の増加や稅收の増加が見られた。このような狀況の違いは、第一部第二章で著者自身も述べるところであり(七五—七九頁)、そもそも物理的な狀況が全く異なっていたのである。例えば、第一部第一章で擧げられる『元典章』卷一九「荒閑田土無主的做屯田」(三五—七七頁)中の昂吉兒は、至元一三年以來繼續して淮西の屯田開發に携わった人物である。この一條は、軍隊の食糧調達のための屯田開發を、當地の責任者の昂吉兒が上奏し、それが認められた事實を傳えていることまでは間違いない。その結果、「勢力家の田土擴大に寄與する結果をもたらした」ということも、淮西においては、ある程度よく見られるような事象であったかもしれない。しかし、このような兩淮における屯田開發の狀況とその結果を、江南地域に敷衍するためには、江淮行省の存在や斷例の通達狀況以外にも(七九頁)、兩地域の類似性あるいは關連性を裏づける、より積極的な根據が欲しいところである。

さて、著者が中心として據る史料は『元史』、『元典章』(及び『通制條格』)であり、また各種文集である。著者が各論考を發表し始めた昭和四〇年代—六〇年代ごろにかけて、元代史研究におい

て一般的に利用される史料も、またしかりであった。それらの史料は、例えば『元史』は當然ながら百衲本を使い、文集は比較的大きな圖書館に備えられた四部叢刊所収の十數種と叢書集成所収本をせいで利用できるような困難な時代であった。その中で研究を行うこと自體に、勞を少しも惜しまない努力と、的確な史料操作を行う判斷能力が必要とされたに違いない。一方、『元史』刑法志及び『通制條格』の譯註、『元典章』刑部の點校などが次々に準備・出版されたのは、周知のとおり昭和三〇年代からであり、それらは當時劃期的な研究成果であった。それらの史料のうち『元典章』については、著者は當時では利用が容易でない元刻本を取って底本として採用した。著者がその『元典章』を基本史料として扱い、長年研究を続けることになる出發點も、物としての來歴や性格を見極めて初めてその内容の解釋が生きたものとなる『元典章』の史料自體の魅力にあったのかもしれない。いずれにせよ、著者は、當時の最新成果を積極的に利用するところから研究を始めたのであった。

それから三十年が経ち、日本の元代史研究を取り巻く環境は、その間に大きく變化した。そのため研究スタイルも多様化してきたし、今後も柔軟な對應が必須であることについては、いくつかの研究動向紹介や論說において述べられるとおりである。評者もまた、そのような研究環境の變化を身を以て感じている。その中でも、一九八〇年代から始まった、史料の利用状況の變化及び國際交流の面での變化、この二つが最も顯著な側面だといえよう。本書の内容とは少し離れるが、評者の見方の一つつやや詳しく述べることをお許しいただきたい。

まず、中國大陸・臺灣での典籍史料の整理は、目を見張るものが

ある。文集については、早くは元代珍本文集彙刊、そして元人文集珍本叢刊、北京圖書館古籍珍本叢刊の集部など、シリーズで次々と出版された。さらに、中國大陸を中心として、元人別集、總集など諸史料が、標點を附してどんどん出版されている。地方志では、中國大陸・臺灣から、それぞれ宋元地方志の集成が出版されたし、標點本も作られている。これらは、研究者と基本的な典籍史料との距離をグンと縮めるといふ効果をもたらした。そして、史料との距離は、利便性に結びつくだけでなく、心理的な史料との距離を克服して、史料全體を見渡す目を養うことにも結びつく。新たに整理・出版されたものの中には、現存する最良の刊本や珍本を収めたもののがかなりある。そのために、それらを利用することで、例えば元刊本にしかない記述方式や用語法などの特徴がわかり、そこから當時の常識や規則、人々の考え方が読み取れる。また、その本自體がどのような経緯で整理され出版されたかなど、物としての性格を追究するうちに、さまざまな事情に氣づくことができる。そして、これらと明清の別刊本を比較することで、重要な事實が発見されることも多々ある。

典籍史料以外でも、數は多くないが元代の文書が発見され、それが出版された。そして、他の時代にも當てはまることではあるが、碑刻史料についてはさらに整理が進んでいる。宋代以來の石刻書の集成が出版されただけでなく、道教關係の碑文が整理校訂されるなど、重要な特定分野での研究も生まれている。石刻の拓影もまた、寫眞で多數公表されるようになった。これらの史料は、全てここ十數年の間に初めて利用の便宜が圖られたものである。これらの、いわば新資料をフル利用するような研究も、日本では最近目にするよ

うになつてきた。

もう一つの側面、國際交流の進展は、さらに重要なポイントである。そもそも、右記のような史料が容易に日本にもたらされるようになったのも、その一環である。歐米での研究との相互交流の時代は長く、今も續いている。それに加え、現在、我々は中國大陸や臺灣などでの研究の成果について、日本に在りながら、ほぼその全貌を見ることができるようになった。このような恵まれた好環境になつてからは、まだ十年も経っていないし、國際協力研究などの名のもとに、本當の意味での相互協力・相互理解が進むのは、これからともいえるだろう。このような研究のボーダーレス化は着實に進展しており、その分アンテナを高く掲げて相互の成果を利用するよう努める必要が出てきたのである。

また、人的交流は一九八〇年代から徐々に盛んになつてきている。とりわけ、ここ數年、海外の圖書館の利便性や手頃な交通費を考慮に入れた上で、日本人が海外に出て、研修、留學、史料調査などを積極的に行うようになっていゝる。その中で、各國の研究者がそれぞれ抱えていた問題を解決する糸口が容易に見つかることもあり、逆に思わぬ處に疑問を抱くきっかけとなつたりする。當地の圖書館において、自らの目で史料を見、自らの手でそれに觸れることができるのも、物としての史料を痛感するよい機會になる。

これらすべては我々が現在おかれている研究狀況であり、今後、この狀況を否應なく認識、享受していかなければならない。そして、環境の利點を生かす中で、本書について舉げた疑問點も、新しい答えを見出すことができるのではないだろうか。具體例を挙げれば、第二部第二章で問題とした科擧に關する問題は、例えば中央

政府、或いは官僚や士人たちが、科擧再開に向けていつどのような準備をしたのか、そして科擧再開後の科擧實施のシステムはいかにあつたかなど、國外の研究や新たに整理された史料を利用して追究することができるよう。また、新出の文書を用いて、徵稅の具體的側面に踏み込むことも可能である。しかしながら、繰り返すようだが、このような意味では氣を抜けないが、非常に恵まれた狀況は、ほんの十數年前から始まつてきたことであり、利用可能な史料をフルに利用して研究を行つてきた著者の功績は高い評價を得てしかるべきものであり、著者の論稿の多くが海外で翻譯されているのもうなずける。そして、その中で作り上げられた元代史研究の一定の水準は、もちろん今も色あせてはいないのである。

最後に、國際交流に關連して、本書に特徴的な史料引用への配慮を、特に指摘しておきたい。本文に史料を引用する際、各論文においては、日本式の書き下し文（及び意味を明確にするためのルビ）のみを採用しており、これは、現在の日本の中國史學の論文の基本スタイルでもある。しかし、著者は本書を編集する際、もともとどの論文の體裁を破り、本來主に註に收められていた句讀點を施した原文を、書き下し文に並べて本文中に引用した。これは評者自身も述べるように、古代漢語とは違つた近代漢語やモンゴル語直譯體風漢文など、多様な漢文を正確に理解していこうとする際の意義深い決斷である。このような方法が讀者に最も利便を與えるかどうかは、また別問題であり、書物の出版の際に必ず問題となる分量という視點からしても、賛否兩論があるかも知れない。しかし、各雑誌に掲載された論文に比べ、一冊にまとめられた書物は、日本國內だけでなく、海外の研究者の目に觸れる機會が格段に増えるに違いない。

書き下し文という、彼らにとっての一つの壁を取り拂おうとする著者の意圖が読みとれる。本書の末に、英文だけでなく、中國語のサマリーが附されるのも、その姿勢のあらわれであらう。特に、著者が扱う『元典章』は、全體を通しての點校・翻譯は未だ存在しない困難な材料である。その理解の正誤は結論の方向に大きく關わるものだけに、引用への配慮の意義は大きい。今後現代語譯も含めた、どのような引用が最も望ましいのかを考えるきっかけにもなる。我々日本人が、外國史として中國史を専攻する際に、外に向けて自分の研究を發信し、お互いに研究を高め合おうとする著者の姿勢には、見習うところがあらう。

このような配慮もふくめ、著者の一連の研究をまとめた本書は、一三〜四世紀の中國研究を目指すものだけでなく、廣く中國近世史、經濟史、社會史などを志す讀者にとって、よき道標となるものである。著者には、本書に收められた論考以外にも、『元典章』の基本的解讀に關わる論考や元代法制史に關連する研究も數多く存在する。それらについても本書のように本としてまとめられ、讀者の利用の便が圖られることを期待して、書評を結びたい。

註

- (1) 本書の書評としては、徳永洋介「異民族支配下の中國社會を問う確かな一歩」『東方』二〇四（一九九八年二月）、森田憲司書評『史窓』五五（一九九八年三月）、矢澤知行書評『歴史學研究』七一五（一九九八年一〇月）がある。第一部第四章には、『法制史研究』四六（一九九七年三月）に池内功氏の書評が、第二部第一章には、『法制史研究』四二（一

九九三年三月）に池内氏の書評が、そして同部第二章については、『法制史研究』四〇（一九九一年三月）に川村康氏の書評がある。なお、第一部第二章第二・三節の内容は、南京大學元史研究室編『內陸亞洲歷史文化研究—韓儒林先生紀念文集』（南京大學出版社、一九九六年一月）中でも、『元代江南社會の官・民構造と徵稅請負制度』として論じられる。

- (2) 周良霄「札記二篇」『元史論叢』六（中國社會科學出版社、一九九七年五月）二、南人々與北人々、拙稿「趙孟頫の活動とその背景」『東洋史研究』五六—四（一九九八年三月）註（16）を参照。

- (3) 宮紀子『孝經直解』の出版とその時代、『中國文學報』五六（一九九八年四月）五、『孝經直解』をめぐる人々。

- (4) 『至順鎮江志』卷一五、卷一六、及び太田彌一郎「元朝の私租減免令をめぐる」『東北大學東洋史論集』三（一九九八年一月）四、元朝の官僚構成を参照。

- (5) 杉山正明「日本における遼金元時代史研究」『中國—社會と文化』一一（中國社會文化學會、一九九七年六月）、同「モンゴル時代史研究の現状と課題」佐竹靖彦等編『宋元時代の基本問題』（汲古書院、一九九七年七月）、中砂明徳「江南史の水脈—南宋・元・明の展望—」『岩波講座 世界歴史』一一「中央ユーラシアの統合」（岩波書店、一九九七年一月）など。

一九九七年六月 東京 汲古書院
A5判 一七十四七七十三五頁 一三〇〇〇圓